

序章	なぜいま「安全第一」なのか？	13
	(1) 頻発する事故は社会の「共有財産」なのか？	13
	(2) 「安全神話」は「安心神話」だったのか？	19
第1章	「安全」をめぐる諸研究と本書の視座	27
	(1) メタ学問としての「安全学」成立まで	27
	(2) 文化的ハイブリッドとしての「安全第一」へー「生活知」のレベルから	32
第2章	言説形成より見た日本的「安全第一」——戦前・戦中期	41
	2-1 民間主導の時代	41
	(1) 民間活動としての「安全」(1912-1921年)	41
	1) 地域に閉じた「安全」—足尾鉾山における「安全」	41
	2) 民間における組織活動の開始—工場における「安全」	43
	(2) 安全活動への警察の介入—工場警察、交通警察の登場	53
	2-2 国家による間接的関与の時代	57
	(1) 内田嘉吉と「日本安全協会」の活動(1921-1925年)	57
	1) 内務省社会局の設立と「日本安全協会」	57
	2) 「安全」理念の啓蒙①——善悪二元論	58
	3) 「安全」理念の啓蒙②——崇り伝承を通じた災因解釈	61
	4) 「安全」理念の啓蒙③——英雄伝承に倣って	62
	5) 「安全」理念の啓蒙④——大乘仏教・小乗仏教とのアナロジーから	66
	6) 労働者たちの反感と無自覚	67
	(2) 蒲生俊文と「産業福利協会」の活動(1925-1936年)	68
	1) 「産業福利協会」の沿革と活動	68
	2) 工学対法学、そして「漸進主義」への落着——アメリカとの比較から	71
	3) 「安全」をめぐる諸概念の登場と「安全週間」の実施	73
	4) 労働者たちの現実認識	75
	2-3 国家による直接的支配体制への移行	77
	(1) 産業報国への動員—協調会の活動と「協調会産業福利部」(1932-1940年)	77
	1) 協調会から協調会産業福利部へ	77
	2) 厚生省の設立と安全活動	79

- 3) 物語られる「安全第一」—機械への愛着心の醸成 82
- (2) 総力戦体制の確立(1940-) 85
  - 1) 総力戦体制への移行—大日本産業報国会への統合 85
  - 2) 産業戦士像の構築 88
- (3) 小活—「安全」理念の受容をめぐるハイブリッド 92
  - 1) アメリカ流洋才とのハイブリッド 93
  - 2) ドイツ流洋才とのハイブリッド 93

### 第3章 言説形成より見た日本的「安全第一」

#### ——高度経済成長期——101

#### 3-1 労働災害の急増と「安全」意識の再燃——マニュアル化される労災イメージ 101

- (1) 「安全」再降臨の時代背景 101
  - 1) 高度経済成長の光と影 101
  - 2) 労災実態のレトリックを超えて 104
- (2) 災因認識をめぐるターニングポイント 105
  - 1) 従来からの労災認識 105
  - 2) 「safety」としての再出発だったのか?——G. H. Q 特別「安全顧問」ウォルターの問いかけ 108
- 3) マニュアル化される「安全第一」 112

#### 3-2 創出される労災イメージ—労働省の指定工場化 115

- (1) 労働者の技能を磨り潰す「安全」の語り——「身代わり」言説と「産業安全映画」 115
  - 1) 「保護具=身代わり」という語り 117
  - 2) 「産業安全映画」を貫く「フル・プルーフ」 123
- (2) 潜在危険の発見とその形象化 128
  - 1) 顕在危険から潜在危険へ 128
  - 2) 潜在危険をめぐるヒヤリハット運動 130
  - 3) 形象化された潜在危険—「災害小僧」の登場 132
  - 4) 形象化された「安全第一」—「緑十字」を掲げる「安全小僧」 136

### 第4章 社員教育システムを通じた「安全第一」の実践——139

#### 4-1 安全教育という名の「監視」 139

- (1) 「監視」としての安全教育 139
- (2) 監視の象徴としての作業着 141

- (3) 監視される「笑顔」——感情管理をめぐる 145
- 4-2 「安全」テキストによる教育実践——原著と翻訳の比較から 148
- (1) 社会科テキストにみる安全教育 148
- 1) マニュアルからテキストへ 148
  - 2) 社会科教育の礎・灘吉国五郎 149
  - 3) テキストの構成から何が読み取れるか 153
  - 4) 「愛社心」による「安全第一」実践の喚起 156
- (2) 「安全」テキストの指導原理—ハインリッヒ理論 159
- 1) ウォルターからハインリッヒへ 159
  - 2) 原著にみる「ハインリッヒ理論」の概要 162
  - 3) 邦訳版「ハインリッヒ理論」のコンテクスト 168
- 4-3 ねじ曲げられたハインリッヒ理論——灘吉資料に見るテキスト化の軌跡 173
- (1) 「ハインリッヒ理論」の日本的受容と教育実践 173
- 1) U. S スティール会社の「安全第一」逸話と物語化 173
  - 2) 「安全はもうかる」／「損失は補償する」 176
- (2) 労働者たちの静かな叛乱 182
- 1) 灘吉資料にみる「ハインリッヒ理論」流用の現状 182
  - 2) 演出された「安全」の虚構性 186
  - 3) ハビチュアル・レスポンスとしての「安全」実践 189
- 4-4 生き抜くための「戦術」——生活知による「安全」の読み替え 191
- (1) 「タコをやる」という抜け目なさ 191
  - (2) 「安全」をめぐる生活知が「不安全」を招く 195
  - (3) 「安全」のための「不安全」という逆説 197

終章 要約と展望——201

- (1) 日本近現代史における「安全第一」研究の意義 201
- (2) 比較文化論の射程としての「安全第一」 205

参考資料 215

参考文献目録 221

あとがき 227

